CULTURE

南光の「偏愛」コレクション

1969年のデビュー以来、売れっ子歌手として、童謡の歌い手として、さらには女優にタレントとマルチな活躍を続ける由紀さおりさん。高校生の頃、ラジオから流れる澄んだ歌声に聞きほれた桂南光さんは、その後、関西のテレビ番組で約10年共演し、おちゃめで飾らない人柄にも魅了されたと言います。今もみずみずしい歌声を維持し、新たな挑戦を重ねる由紀さんが歌い手として大切にしているものは何か。南光さんが、そのこだわりに迫りました。【山田夢留、写真・梅田麻衣子】

舞台こそ居場所 由紀さおりさん の巻

由紀さんが桂文珍さんと司会を務めた「おもしろサンデー」（読売テレビ、1982〜92年）で知り合った2人は、約20年の時を経て、再び同局のバラエティー番組で共演している。今月上旬の収録日、楽屋で由紀さんを出迎えた南光さんは「文珍さんとは丁々発止でやってはったし、今はお笑いの若い子らがわーわー言うてる中で負けてない」と、まずはその「バラエティー力」をたたえた。

「私たちって、歌手がただ取り澄まして歌ってるだけでは、うまく残れなかった時代の最初なのよ」。由紀さんはあっけらかんと応えると、「私、子どもの頃から客席が波打って笑うっていうのが快感だったの」と明かした。童謡歌手として活躍していた少女時代、すでに司会者との掛け合いで笑いを取るのが大好きだったという由紀さんの話に、「ドリフターズとのコントとか、嫌々やってはったんちゃうんですね」と南光さんが目を丸くする。「レコーディングは嫌いだったけど、お客さんがいて拍手があると、全然元気の出方が違う子どもだったの」

生の「間」で歌う醍醐味

80年代半ばから童謡に軸足を置いていた由紀さんは、40周年を機に「自分は歌謡曲の歌い手としてデビューしたので、そこを置き去りにはできない」と決意。トーマス・ローダーデール率いる米国のジャズオーケストラ「ピンク・マルティーニ」と作ったアルバム「1969」（扇マーク）で歌手人生に新たな一ページを刻んだ。「言葉の違いを超えて支持されたのは、やっぱり由紀さんの声。心地よく琴線に触れる音は、万国共通なんですな」。南光さんが改めて感心していると、由紀さんは「1969」を通じて得た、世界的ヒットという事実以上に大きなものについて語り始めた。

「トーマスは電気的な音を一切使わないし、今はみんな当たり前に使うリズムボックス（リズムを刻む機器）も使わない。ピアノとベースのリズムだけで全部レコーディングしたの」。あうんの呼吸で進められた協演に、歌い手として大切にしてきたことを再確認した由紀さんは、自身のバックバンドにも「自分の中のリズムを信じてやってください」と、機械を外すよう依頼したという。「生身の音楽」へのこだわりは、「（曲に入る前の）ワン、ツー、っていうカウントもいやなの」という徹底ぶり。「だってさ、いただいた拍手をどうやって切って次に出るか、その呼吸が大事でしょ。自在にお客さんを引っ張ったり、ふっと放したり。噺家さんもそれが醍醐味じゃない？」

「おっしゃる通り。『間』が大事やし、むつかしい」。南光さんが大きくうなずいた。同じ舞台人として、気付けば「間」や「緩急」について語り合っていた2人。「でもね、歌い手に求められるのは、そういうものじゃないのよ」。ほんの一瞬、声を落とした由紀さんだったが、「だから、そういう舞台を自分でしつらえようと思ってね」。この秋、新たなライブを企画していると語る由紀さんに、南光さんはエールを送り、一言付け加えた。「『間』と『緩急』の話、今度、若手の噺家に講演したってください」

ゆき・さおり（写真右） 群馬県出身。童謡100周年の今年、「あしたへつなぐ」と題した童謡コンサートを姉の安田祥子さんと開いており、9月7日にはNHK大阪ホールで開催。南光さん＝同左＝とは実は耳鼻科のかかりつけ医が同じ。「こんな悪声と同じ先生で、申し訳ない」と南光さん。

（扇マーク） 2011年発売。デビュー曲「夜明けのスキャット」をはじめ、1969年のヒット曲を収録。まず欧米で人気に火が付き、約50カ国で発売・配信される世界的ヒットとなった。

今月の まいりましたなあ

「夜明けのスキャット」は高校生の頃、深夜放送で連日流れていました。受験勉強と称して遅くまで起きていた時に、なんとも疲れた心を休ませてくれる清涼剤として聴かせてもらってました。その後も、「手紙」や「恋文」など、由紀さんの美声と歌唱力に魅了され憧れ続けていましたが、一緒にお仕事をさせてもらうと、なんともざっくばらんな方で、トークの言葉遣い、間の取り方、話の展開のうまさに、ビックリしたことを覚えています。今回のお話で、その秘密の一端がよくわかりました。

噺家も驚く話の名手

文・え 桂南光

デジタルプラス トーク拡大版

一般市民の心の底に優生思想は潜んでいる

もり・けん
ジャーナリスト、1968年生まれ。早稲田大卒。在学中からライターを務めた。2012年『「つなみ」の子どもたち』で大宅壮一ノンフィクション賞、17年には『小倉昌男 祈りと経営』で大宅壮一メモリアル日本ノンフィクション大賞受賞。

キーワード

注❶＝精神保健福祉法に基づき、自傷や他害の恐れがある精神障害者を、2人の精神保健指定医の一致した判断により都道府県知事が強制的に入院させる制度▽注❷＝1964年、エドウィン・ライシャワー駐日米大使が、精神疾患のある少年に刃物で刺されて負傷した事件。

森健の現代をみる

精神医療と私たち

一昨年7月に起きた「相模原障害者施設殺傷事件」によって、極端な優生思想や精神医療の在り方が注目された。事件から何を学ぶべきなのか。また同分野の医療の現状はどうか。ジャーナリストの森健さんと、国立病院機構仙台医療センター総合精神神経科部長の岡崎伸郎さんが語り合った。【構成・栗原俊雄、写真・渡部直樹】

今回のゲスト 岡崎 伸郎さん

おかざき・のぶお
精神科医。1958年、仙台市生まれ。東北大卒。仙台市精神保健福祉総合センター所長などを経て現職。専門は精神医学、精神病理学。日本精神神経学会理事や日本精神病理学会大会長などを歴任。著書に『星降る震災の夜に』など。

障害者の意思尊重 地域で支える共生型に

森 地方紙の連載で、精神疾患の人たちが30〜50年と長期間入院していることに驚きました。2004年に厚生労働省がこうした人たちは地域で受け入れる、という方針を示したはずですが。

岡崎 ご本人が「実家に戻りたい」と希望しても多くの壁があります。この十数年で地域移行が順調に進んだとはとても言えない。

森 他の報道では精神疾患で長期入院中の女性が家族と同居を願った際、父親に「重荷だ」と拒絶される場面があり衝撃的でした。

岡崎 精神病床の入院患者は高齢化が進んでいます。およそ30万人のうち、65歳以上が半分を上回っています。親から代替わりしてきょうだいが家を継いだら、なおさら引き取るのは難しい。日本がさまざまな分野で長く寄りかかっていた家族制度が限界に来ているのです。一方、12年に自民党が発表した憲法改正草案では、家族の価値や役割を強調する復古的な内容で驚きました。今や家族だけでなくいろいろな制度によって社会全体で支える方向にかじをきらなければいけないのにね。

森 イタリアは地域移行を打ち出し精神科病院をなくしました。

岡崎 それだけラジカルなことができたのは、元々公立の精神科病院が主体だったこともあります。一方日本は病床の約9割が民間経営。国の主導による政策転換がしにくい。また「地域での共生」という総論には賛成でも、いざ近所に精神障害者のグループホームが開設されるとなると、反対運動が起きることがある。

森 いまだに地域社会の偏見も根強いのですね。

岡崎 ただ14年、日本は国連の「障害者権利条約」を批准しました。マスコミは注目しませんでしたが、大きな一歩です。

森 国際条約は「憲法よりは下、しかし国内法より上位」と著作のなかで書かれていますね。何が期待できますか。

岡崎 国を動かす大きな武器になり得ます。たとえば条約第19条には「障害者が、他の者との平等を基礎として、居住地を選択し、及びどこで誰と生活するかを選択する機会を有すること、並びに特定の生活施設で生活する義務を負わない」とあります。これを素直に読めば、入院を続ける必要がなくなったのに、退院先がないために病院にとどまっている「社会的入院」や、病棟をそのまま福祉施設にしてとどまってもらう「病棟転換型居住系施設」は条約に抵触しています。

森 条約に抵触するような施策に公費を投入し続けていいのか、という批判が高まりそうですね。

岡崎 実際、厚労省の検討会が14年、「病棟転換型居住系施設」の在り方についてとりまとめを公表した中には「障害者権利条約に基づく精神障害者の権利擁護の観点も踏まえ」と明記されました。具体的には、病院敷地内に施設を設置する条件として、居住地の選択は精神障害者本人の自由意思によることや、地域社会に参加する機会の確保、プライバシーの尊重などが盛り込まれました。条約効果と言っていいでしょう。

森 そうした中で起きた一昨年7月、障害者施設で19人が殺害された相模原事件では、精神障害者への偏見、障害者たちを事実上隔離している現状など、さまざまな問題が浮き彫りになりましたね。

森健さん（左）と国立病院機構仙台医療センターの岡崎伸郎さん＝東京都千代田区で14日

岡崎 その「津久井やまゆり園」事件は、極端な優生思想の持ち主によるヘイトクライムです。ところが容疑者が精神保健福祉法でいう措置入院＝注❶＝の経験者だったことから、「精神医療は危険人物を野放しにするな！」などと世論がミスリードされました。しかし極端な優生思想も思想の一つである限り、精神科の治療対象ではありません。過去を振り返ると、精神障害者やその可能性がある人による大事件が起きるたびに、治安対策が精神医療に押しつけられてきました。「何とかしなければ社会が危険だ」という国民感情が高まり、為政者は精神障害者をスケープゴートにする。その結果、異形の制度や法律ができてしまう。ライシャワー事件＝注❷＝でもそういう波にのまれかけたし、01年の大阪・池田小学校事件を契機として心神喪失者等医療観察法ができました。犯人は結局、心神喪失者ではなかったのに、です。

森 今回の事件でも？

岡崎 不当にも事件の原因が措置入院制度の不備に焦点化され、政府は精神保健福祉法改正をもくろみました。その内容から「精神障害者を治安対策の対象とするのか」との批判が当事者団体などから噴出しました。参院で審議の末に可決。昨年9月の臨時国会で衆院が解散されたため廃案となりました。先日閉幕した通常国会では出されませんでしたが、今後、再び提出される可能性があります。しかし、犯罪防止策を精神障害者施策や精神医療に押しつけるような法律になることは許せません。

森 精神科医療の現場に対する影響はどうですか。

岡崎 戦後、国は精神障害への偏見を助長する政策をとり続けました。その根幹が、社会から隔離して病院に収容することです。近年、当事者団体や関係者らの努力にもよってやっと、隔離収容主義から「地域で支える共生社会型の精神医療」へという流れができつつありました。今回の事件でそれが逆戻りすることが懸念されます。社会には冷静になってもらいたいですね。精神障害者で危険な行為に及ぶ人はごく一部ですし、触法行為があったとしても、精神症状との関係が薄いことが多い。無差別殺人のようなことはむしろまれで、長年葛藤のあった家族が被害者になる例が目立つのです。

森 相模原事件の際、被害者の実名が遺族の意向で公表されなかったことに違和感がありました。遺族たちが被害者を施設に長期間預けていたことを知られたくなかったのではないか、と。だとしても単純に家族を責めることはできませんが……。

岡崎 知られたくないのは、ごく一般的な国民感情ですよ。精神疾患は統合失調症やうつ病、摂食障害、認知症などさまざまで、その数も膨大です。知的障害も含めると、ほとんどの日本人がそうした障害者の家族や親戚をもっているはずです。しかしその事実を言えない人が多い。一家の恥だという意識が根強いのです。

優生思想は、なにも特殊な人だけのものではない。一般市民の心の奥底にも潜んでいると思います。そういう普通の市民の価値観や社会的因習が制度にまでなっていくんです。旧優生保護法はその一つ。市民社会に根深く巣くう優生思想をどうやって超克するのか。文明にとっての永遠の課題です。

対談を聞いて

「冷静になってほしい」。相模原事件について、岡崎さんがそう話したのが印象に残った。凶悪事件が起きると、分かりやすい理由、速効性がありそうな対策が求められる。その結果、報道や世論があらぬ方向に行く恐れがある。ライシャワー事件はその典型だ。さらに政治や行政が世論の期待を理由に、市民の人権を犠牲にしかねない。再発を防ぐために何をすべきなのか、じっくり考えたい。

CULTURE

トレンド観測 TREND WATCHING

Theme

複雑で混沌とした中世 応仁の乱に脚光

英雄なき時代とリンク

日本の中世は400年近く続いた。小説やドラマ、歴史書でしばしば描かれるのは、鎌倉時代の動乱や群雄割拠の戦国時代だ。しかし近年、あまり人気がなかった時代、足利幕府初期〜中期が注目されている。

たとえば『初期室町幕府研究の最前線』（日本史史料研究会監修、亀田俊和編・洋泉社歴史新書y・2018年）、『観応の擾乱』（亀田俊和著・中公新書・17年）など、この時代を扱った新書が目に付く。筆頭は『応仁の乱』（中公新書・16年）。現在33刷47万5000部。昨今の出版不況下では、驚異的なベストセラーだ。

著者は呉座勇一・国際日本文化研究センター助教(37)。近著に『陰謀の日本中世史』（角川新書）がある。東京大在学中、専攻を選ぶところに9・11（アメリカ同時多発テロ）が起き、世界が先行き不透明になっていくことに関心があった。「混沌とした時代、日本史で言えば中世だと思った」

中世史の魅力を語る呉座勇一さん＝東京都豊島区で6日

戦国時代は「全国統一へと向かっていく分かりやすさ、ダイナミズムがあります。研究者にとっても明確なゴールがあって分かりやすい」。しかしその前は「先が見えず、つかみどころがない」。一般の読者同様、研究者も分かりやすく爽快感のある歴史を追いかけがち、ということか。

「私はよく分からないところが面白いと思いました。応仁の乱はまさにそう」。確かに武将たちが戦った理由、勝者と敗者も判然としない。織田信長や豊臣秀吉のような英雄もいない。

ただ歴史好きの読者としては、「日本史の画期」とも言われるこの乱には興味がある。しかし読み通せる良書が見つからない、ということもあった。岩波新書の『応仁の乱』が刊行されたのが実に45年前の1973年。刊行点数が少ないのは「複雑すぎるので新書サイズにまとめるのは難しい。単行本にすると高くなり、一般の読者に届きにくい」と呉座さん。

その新書にまとめるべく、登場人物を絞った。かつ地域は、乱に関する史料を残した興福寺の僧2人がいた、大和（現奈良県）を中心とした。関東でも九州でも戦いはあったが、あえて2人の視線に絞ったのだ。

それでも「複雑なので、あまり売れると思わなかった」。なぜヒットしたのか。「高度成長期なら秀吉が人気があった。日本経済が敗戦の焼け野原から立ち上がり右肩上がりだったからこそ、底辺からのし上がって頂点に立つ出世物語に共感を持ちやすかった」。しかし「秀吉の出世物語は、サラリーマン出世街道にたとえられることが多かった。しかし今の時代は終身雇用自体がリアリティーを失っていて、（読者が）共感できない。英雄的な人もいない。そういう時代とリンクしたのでは」。

「応仁の乱を知りたい」という潜在的な読者と、先行きの見えない世相、そして呉座さんの筆力があいまって日本史の新たな鉱脈が掘り当てられた。研究の深化に期待したい。【栗原俊雄、写真も】